

一万円札の顔

元号が令和に変わる直前（2019年）の4月、政府は一万円札、五千円札、千円札のデザインを新しくすると発表しました（実際に流通されるのは2024年度上期から）。偽造紙幣対策として、20年ごとに主要な紙幣のデザインが大きく変わるのだそうです。新紙幣では、お札に描かれる人物も変更されます。新しい一万円札の肖像になる人物は「**渋沢栄一**」（1840～



1931)。一昨年のNHK大河ドラマ「**青天を衝け**」の主人公であり、後年「日本資本主義の父」と呼ばれるほどに、約500もの企業の設立に関わった人物です。ところで、ドラマでは、**吉沢亮さんが演じる渋沢栄一**が渡欧している間に江戸幕府は倒れ、舞台は明治に移りますが、主人公不在の間の国内の出来事は（東京2020五輪関連番組と重なったことで）駆け足で描かれました。実は、もう少し長く見たかった人物もいました。新政府軍との徹底抗戦を唱えたことで幕府方からも罷免され、所領の上州権田村（群馬県高崎市）で、理不尽に殺害された「**小栗忠順**」（おぐりただまさ）（1827～68）です。数少ない登場シーンの中でも印象的だったのが、**武田真治さん演じる小栗**が斬首の直前、口の中から“ねじ”を出して不敵な笑いを浮かべていました。安政7年（1860年）に幕府方の遣米使節目付（監察）として渡米した小栗は、視察したワシントン海軍工廠から“ねじ”を持ち帰っている。何の変哲もない1本のねじは欧米の工業技術力の結晶であり、小栗が目指した日本近代化の象徴でもあった。小栗が手がけた改革や近代化は、外交、通商、行財政改革から金融政策、産業振興など非常に多岐にわたり、しかも幕末の動乱にもかかわらず、明治新政府に引き継がれたのでした。「**大隈重信**」（1838～1922）は、「明治の近代化はほとんど小栗の構想の模倣に過ぎない」と語り、「**福沢諭吉**」（1835～1901）も、国のために命をかけて尽くした人物と讃えています。幕臣ながら、日本の近代化に大きな功績を



小栗忠順（演：武田真治）



残した**小栗上野介忠順**（おぐりこうずけのすけただまさ）。渋沢栄一にも強い印象を与えた先見性を持ちながら、新政府に逆賊扱いされ、41歳で生涯を終えたのでした。**渋沢の新1万円札**の印刷も進んでいるでしょうが、小栗がもう少し長生きしていれば、福沢や渋沢より先に1万円札の顔になっていたかもしれないのです。